

「女人史を学ぶ会」を終えて

3年前の12月から全6回で、はりまと九州を結び「女人史を学ぶ会」を開催してきた。女人史を学ぶとは個と歴史をつなぐことであり、自分の身を通して女性の問題を知ることだった。女性問題の学習会はたくさんあるけれど、沈黙して語られることのない、性というプライベートな領域に踏み込むものはほとんどない。社会の中でも個人の中でもその沈黙した部分に置き忘れられていく事柄がある。上滑りにはしない学びの会。だから沈黙したものが浮き上がって混乱に混乱を重ねた6回でもあった。まさにいばらの道の上、様々な意味での出会いの会だった。

人は成長する時、様々なことを学び生きる力として行くが、自身自身について学ぶ機会はほとんど持っていない。それもそのはず生きるための競争社会としてこの世があるように思い、学べと言われるのは生きるための知識技能であり、それを評価され、人は刻々と様々な選別を受けて育つ。その一番初めが男であるか女であるか。性による選別はその後の成長に大きな影響を与える。生得的な気質だけではなく作られ

ていく性。「男は差別する方に自分をゆがめ、女は差別される方へ自分をゆがめる」(園田久子さん)誰も性と無関係に生きれないし、人格形成に大きな影響を受けるのだ。

私たちは国策としての性のコントロールを受けて来たという歴史がある。女性を産む性として男性の下に位置付け、しかもその女性の中に、家制度と公娼制度により「産む立場」「売る立場」の選別を設け、具体的に、価値的にも完全なる女性同士の分断をはたし、制度の中にそれぞれを困い込み、連鎖とその秩序を保持してきた私たちの社会。それは戦争という国策とともにあったのだ。その歴史に根ざした個々の苦悩。女であることの苦しみ。嫁、姑であることの苦しみ。妻、母であることの苦しみ。身を売らねばならない女性の焼けつく苦悩。そういう苦悩を孤独に抱えさせられた女である人間を母とする人間の苦悩。女性が女性を下敷きにしていくことにとどこまで気づいているかという糾弾。連帯を知らずに、女が女を差別し、だから自覚されない自らの苦悩。その無自覚なゆがみの受け渡し。親子の問題として横たわっている。性の問題は、人間全体の問題に波及する。

関係性のベースといっているもの。

社会という空間の全体性、歴史という時間の全体性、その中に自分の苦しさを見出すこと、その位置を知ることとはとても大切なことだ。それに加えて、個々人の内側に同じだけの空間的、時間的全体があり、その中どこに「私」が立っているのかを見て行く作業。それは共同ではできない、それぞれがプライベートなアプローチが必要だけでも難しいことだ。一人ひとりの問題なのだけれど、一人ではできない。出会いと、問い合いと、支え合いがなければできない作業。

最初に語ってくれた園田久子さんの「肉片の付いた言葉」は、受け取りがたいものであり続け、受け取れず逃げ出したい衝動に耐えてそこに居続けた一人ひとり。やがて自分の位置を知り、自分の肉片の存在にも心当たりを感じ始めた。

男と女の間を分断し、女と女の間を分断し、私と私の間を分断する。その力はどこから来るのだろう。そしてその分断に悲しみを感じるのなぜなのだろう。

エロスとはギリシャ神話の神の名。すべて満ち足りた神とすべて欠乏し

た神との間に生まれた「求め続けて止まない」神。分断されつつもお互いを求め、そのままではいられないダイナミズム。そこを見続けたい。

たとえ学習会をしてもそこに参加できない人がいる。そこに来ることのできない人、どこまでも会うことな上下左右に分断された人に思いを馳せたいと、園田さんは最後に言った。その人に対する責任は5対5、7対3という部分的なものではなく、10対10、100%で感じるものが引き受けて行くことだ。それは具体的にその人を助けることはできないけれど、10対10、100対100の責任において、自分自身を開いていくことをしたい、と園田さんは自分自身にいうように話を終えられた。それを聞いて私は「歎異抄」の1節を思い出した。「すえとおりの大慈悲心」。私たちを開かせて止まない、その力の働きは、一人ひとりに届いている。

(2011.3.11 惟蓮)

